

日本人学生と外国人留学生における合意形成過程の比較

大浜 るい子

Process to An Agreement for Japanese

Ruiko OHAMA

0 はじめに

外国人がしばしば訴えることの一つに、日本人と話しているといつ合意が行われたのか分からないということがある。知らないうちに事が決まってしまうというのは、それが直接利害に関わらなくても愉快なものではないだろう。ところが日本人からすれば、相手の都合に合わせてこそすれ決して自分の都合を押しつけたことはないのに、そのようなことを言われては心外である。一般に異文化間の誤解の多くは、悪意とは無関係である。それどころか、互いが失礼にならないようふるまった結果であることが多い。ただわれわれには、それら行動の背後にあるそれぞれの文化に固有な行動上の規範が見えないために、どちらも自分の尺度で測ってしまう。異文化間のこのようなコミュニケーションギャップは、言語教育が単に言語のみの教育ではなく、当該社会の中で摩擦なく生活することができるような教育までが視野に入ってくる中、個別的な出来事として当事者達の自由な解釈に任せるのではなく、ある程度統一的な説明と最低限の方略を示さなければならない時期にきている。ただどのように、またどの程度まで取り上げるかについては、慎重でなければならない。社会的規範やそれに基づく方略は、言葉にすると、とたんにステレオタイプとして固定的に受け取られてしまうところがある。これらは本来言葉によって意識的に教えられるものではなく、知らず知らずのうちに戦略的に身につけていくものであるだけに、教育の場に持ち込むには相当の難しさがある。

本稿は、そのような認識をもった上で、言語による行動的側面を言語教育に取り込むために、どのような具体的提案ができるかを考えるための一つの試みである。以下に示すのは、日本人学生と留学生が行なったロールプレイ談話の分析から、なにが原因でそのようなギャップが生じうるのかを明らかにしようとするものである。

1 分析資料について

ここで分析対象としたのは、日本人学生20人と外国人留学生20人がそれぞれ2人1組で行った依頼場面のロールプレイ談話である^{註1}。ロールプレイは友人間の会話という設定で、「卒業論文のためのアンケート調査に協力してもらうよう依頼をし、調査日時と場所を決める」というものであった。この設定は、ロールプレイヤー達にとって日常的に経験することでイメージしやすいものであり、またこのようなお願いは現実には「お互い様」なので、快く引き受けられることが多いということであったが、それはロールプレイによく反映されていた。その意味では、紆余曲折の後、合意を見るという展開ではなく、いずれもすんなり合意に至っている。一見したところ、日本人学生によるものと留学生によるもの間に大きな違いは認めにくく、異文化間のコミュニケーションギャップとは無縁の資料のように思われた(表1参照)。しかし、いかに問題がないように見える会話であっても、その時に働いている行動規範は、問題があらさまになる時の行動規範と同じものであるはずである。うっかりすると見落としてしまう小さな違いの中に、大きな誤解につながる原因が隠れているはずである。

談話中分析対象としたのは、アンケート調査への協力が表明された後、実施のための日時場所についての相談が開始するところから合意を見るまでの談話部分とした。すなわちそれに先行する談話開始の挨拶や互いの近況報告、調査協力の依頼と受諾、そして後続する談話終結に向けてのやりとりや別れの挨拶は対象外とした。以下、対象とした当該談話部分を「相談局面」と呼び、相談局面は「日にちに関する相談局面」「時間に関する相談局面」「場所に関する相談局面」を区別する。なお、説明のなかで、調査協力への依頼から受諾までの部分を「依頼局面」と呼ぶことがある。

表1は、相談局面の談話展開を日本人学生と留学生の典型例で示したものである。表から明らかなよ

うに、それぞれの相談局面は「テーマ導入の問いかけ」「提案」「合意」から成っている。以下の分析はこの順序で行う。

2 テーマ導入

まず問題にしたいのは、「いつがいいかな」「時間はどう」「どこでやるん」などのテーマ導入に関わることである。ひとつは、それを対話者のうちのどちらの役割をもったほうが行ったかという点であり、もうひとつは、その際用いられた表現形式には何か違いがあったかという点である。

まず、テーマ導入は依頼者からも被依頼者からも

行われたが、表2が示すように、日本人では依頼者が行うことが多く(23回中15回)、留学生では依頼者からも被依頼者からも同じように行われていた(25回中12回対13回)。ある行為が一方の対話者によってのみ行われるということは、対話者間の役割が異なることを意味している。直前の依頼局面では、日本人でも留学生でも、依頼をするのは依頼者、依頼され受諾するのは被依頼者と、両対話者間にはっきりと異なる役割があったわけだが、相談局面になると、日本人と留学生でその役割関係に違いが生じたと考えられる。日本人では依頼局面での交替不可の役割関係がそのまま相談局面でも保持されている。今度は相談者と被相談者という役割ではあるが、相談者

表1 相談局面の談話展開例

局面	相談局面の談話展開	局面内の行為
(例1) 日本人学生による談話展開		
日にち	<p>F19: 11月中にね終わらせなきゃいかんよ(ああ)うん、それでその11月中にね、やりたいから、なんかその、11月の間に都合のいい日にちとか場所とかない?</p> <p>J20: ああ、だいたいいつでもいいよ</p> <p>J19: あほんと じゃあ来週なんか</p> <p>J20: ああいいよ</p> <p>J19: じゃあ来週の水曜日</p>	<p>テーマ導入</p> <p>提案 合意 提案 合意 提案</p>
時間	<p>F19: で時間はどう?</p> <p>J20: 来週の水曜日 あ一時間は昼ぐらいがいい、いいなあ</p> <p>J19: ふーん じゃあ昼御飯食べてからにしようか</p> <p>J20: うん</p> <p>J19: じゃあ1時</p>	<p>テーマ導入</p> <p>合意 提案 合意 提案 合意 提案</p>
場所	<p>えーとP食堂でいい?</p> <p>J20: うん</p>	<p>提案 合意</p>
(例2) 外国人留学生による談話展開		
日にち	<p>F2: 日、日にちはいい、いつ?</p> <p>F1: いつ、いつがいい? 私は(うん)いつでもいいよ</p> <p>F2: うん、私もいつでもいいけど週末にしましょう</p> <p>F1: うん、はい 今週の土曜日</p> <p>F2: うん</p>	<p>テーマ導入 テーマ導入 提案 提案 合意 提案 合意</p>
場所	<p>F2: で、場所は?</p> <p>F2: 場所は、Pでいい?</p> <p>F1: あ、P?(うん) はい、分かりましたあ</p>	<p>テーマ導入 提案 合意</p>
時間	<p>F1: それであのう、今週の土曜日Pね(うん)。時間は何時くらいがいい?</p> <p>F2: じゃあ午後1時</p> <p>F1: 午後1時、はいわかりました</p>	<p>テーマ導入 提案 合意</p>

()内はターンの交替が行われない内に相手の発言が挟まれたことを示す。

J: 日本人学生 F: 外国人留学生

—: 非限定的提案 —: 限定的提案(3節参照) **F19**: テーマ導入者(2節参照)

が被相談者に相談を持ちかけるという形で相談者主導で展開したと考えられる。それに対して留学生では、依頼局面での交替不可の役割関係は依頼の受諾と共に解消し、相談局面ではいわば両者が対等に相談し調整し合う、相互に交替可能な役割関係に入ったと考えることができる。すなわち、アンケート調査に協力を約束した時点でその実施と成功は両対話者の関心事になったと思われる。相談には相手にアドバイスを求めるような「に相談」と、あることを一緒に考えて決める「と相談」が区別される(柏崎・足立・福岡1997参照)が、本資料は、同じ「と相談」であっても具体的な場面(ここではアンケート調査の依頼)の中に組み込まれたときに、それがどちらの相談に近いものと解釈されるかという点で、文化によって異なることがあることを示唆している。

次に、用いられた表現形式についてであるが、これは大きく分けて2つのタイプが区別された。すなわち「都合がいい日とかあるかなあ」「何時がよろしいですか」「じゃ場所はどこにしましょうか」など未決を前提にした「うかがい表現」と、「いつやるんかいね」「あ、何時からですか」「じゃどこへ行けばよいでしょう」など既決を前提にした「問いかけ表現」である。表2は、テーマの導入者とその際の表現形式を、日本人と留学生で比較したものである。

表2 テーマ導入者とその際の表現形式 (回)

発話者	テーマ導入者			被依頼者			
	表現形式	依頼者	被依頼者	表現形式	依頼者	被依頼者	
		うかがい表現	問いかけ表現	計	うかがい表現	問いかけ表現	計
日本人学生	15	0	15	1	7	8	
外国人留学生	10	2	12	3	10	13	
合計	25	2	27	4	17	21	

表を見ると、日本人においても留学生においても、テーマを導入するのが依頼者である場合はうかがい表現が多く、被依頼者の場合は問いかけ表現が多いことが見て取れる。これは、そのテーマ(アンケートの実施)を既に予定に入れている相手(=依頼者)と今初めて予定に組み込まなければならない相手(=被依頼者)に向けた表現の違いであることを考えれば、全く自然なことである。

ところが、少数ながら逆の表現が使われており、そしてそれらがほとんど留学生であることに注目したい。依頼者なのに問いかけ表現を使用(12件中2件)し、被依頼者の主導をあてにしたり、また被依頼者自身がうかがい表現を使用(13件中3件)し、自ら主導をかってでるという行為は、先に見た、留学生の相談局面における役割認識の違いを裏づけるものであろう。

3 提案

次に違いが見られたのは、テーマ導入を受けてなされる提案の仕方である。先にも述べたが、我々の資料は、ごくすんなりと合意に至るものばかりで、日時や場所に関して互いに意見が合わず調整したり譲歩したりするものはほとんど見られなかった。ただ、提案の内容に違いがあり、例2のようにそれだけで日時や場所が限定できるもの(限定的提案、一で示す)と、例1のようにそれだけでは曖昧でさらなる提案で絞り込む必要があるもの(非限定的提案、一で示す)とがあった。

(例2) 限定的提案に先行する非限定的提案数0の例

- F1: 時間は何時くらいがいい?
 F2: じゃ午後一時
 F1: 午後一時、はい分かりました

(例1) 限定的提案に先行する非限定的提案数2の例

- J19: 都合のいい日にちとかなない?
 J20: ああ、だいたいいつでもいいよ。
 J19: あほんと、じゃ来週なんか
 J20: ああ、いいよ
 J19: じゃ、来週の水曜日、で時間はどう?
 J20: 来週の水曜日、あ一時間は昼ぐらいがいいな
 J19: ふーん、じゃ昼ご飯食べてからにしようか
 J20: うん
 J19: じゃ1時、

本資料では日・時・場所の3点についての提案があるのだが、上に述べたように、提案されたものを拒否しそれに代わるものが再提案されるということがほとんどなかったため、3×10談話で、合計30の限定的提案がなされる計算になる。表3は、それに至るまでにいくつの非限定的提案が現れたかを、日本人と留学生で比較したものである。

表3 限定的提案提示に先行する
非限定的提案回数の比較

個数（ ）内は割合

発話者 \ 非限定的提案回数	0	1	2以上	合計
日本人学生	9(31.0)	11(37.9)	9(31.0)	29
外国人留学生	17(56.7)	7(23.3)	6(20.0)	30
合計	26(44.1)	18(30.5)	15(25.4)	59

提案回数2以上の中には日本人学生で4回のものが1件、留学生で3回のものが2件を含まれている。

表を見ると、日本人は限定的提案の前に非限定的提案を重ねる傾向があり、他方留学生はいきなり限定的提案をする傾向にあることが分かる。日時や場所が一義的に決定されるものこそが提案と考える立場に立てば、非限定的提案は提案の前提、あるいは条件と考えられるだろう。本資料のような簡単な相談ではなく、少し込み入った内容になった時、たとえば日本人がいくつもの非限定的提案をしたとしても、それらが留学生に提案と理解されないことがあるのではないだろうか。そんな時、明確な提案もないままにいつの間にか合意がなされたという見方をされることは、十分に考えられる。

4 「じゃ」の出現環境

先に、非限定的提案が見方によれば提案ではなく、提案の前提あるいは条件と考えることができると述べたが、日本人はこれを提案だと考えていると結論づけたのは、次に見る「じゃ」という表現の使い方である。

「じゃ」という表現は談話内のいかなるところにも現れるわけではない。「じゃ」は現行の発話交換を中断させ、新たな発話交換を先導させる機能をもつことが知られている(熊取谷1992)。発話交換とは相互行為的談話における最小単位であり、その命題枠が開始発話によって規定される一つの情報単位と見なすことが出来る(Stubbs 1983)。空所に値を与えることで命題を完全なものにするよう働く発話ならどれも同じ発話交換の一部を形成する。我々の談話では、依頼局面ではなく依頼、概要説明、受諾>、その後の相談局面ではなくテーマ導入、提案、合意>がそれぞれ一つの発話交換を構成する。今相談局面に限定すると、最初の提案が拒否され、代案が提示されそれが受け入れられたとすれば、<テーマ導入、

提案、拒否>、<(テーマ導入)、提案、合意>が実現されたと考え、構造的には2つの発話交換が行われたことになる。ところが、日本人に多く見られた非限定的提案は、本来の定義からすれば新しい発話交換とは見なされない。なぜなら、「来週の木曜日」という発話は「来週中」に含まれ、命題を完成させることはあっても、新たな命題枠をつくることにはならないからである(例1参照)。

(再録例1)

- J 19: 都合のいい日にちとかなない? (命題枠: J 19
と J 20が X 日に調査を実施する)
- J 20: あ、だいたいいつでもいいよ (命題枠: J 19
と J 20が X 日に調査を実施する)
- J 19: あーほんと、じゃあ来週なんか
- J 20: ああいいよ (命題枠: J 19と J 20が来週の X
日に調査を実施する)
- J 19: じゃ、来週の水曜日
- J 20: うん (命題: J 19と J 20が来週の水曜日に調
査を実施する)

しかし、例1が示すように、その本来の意味では新たな発話交換の開始時ではない箇所に「じゃ」が現れている。このことは、日本人にとってはたとえ新しい命題枠を作らなくても、非限定的提案は古い提案に変わる新しい提案と認識されていることを示している。このような「じゃ」は日本人で60提案中25回(41.7%)、留学生で51提案中11回(21.6%)見られた。

また、この「じゃ」は単に現行の発話交換を中断させるだけでなく、現行の発話交換を対話者双方が解決済みのこととして確認し合うことによって、次の発話交換へ移行するシグナルである(大浜 1997)ことを考えあわせると、日本人は、新たな提案ごとに直前の提案が解決済みであることを確認する傾向があると考えられる。これは合意時の表現に明確さが欠けること(5節参照)を補っているのかも知れないし、また大浜(1997)が言うように、確認行為そのものというよりは、談話展開を自らの主導のみで行うことが危険であるため、その責任の一端を相手にもとってもらうための方略なのかもしれない。しかしいずれにしても留学生から見れば、これは確認行為に他ならず、未だ合意を見ていないはずのものなのに、日本人はあたかも合意済みであるかのように扱っていると思えるかも知れない。

ちなみに全談話中に現れた「じゃ」は日本人で55回、留学生で47回、その内訳^{注2}は表4に示す通りであるが、他の環境では大きな違いがないことを考えあわせると、提案時の「じゃ」の使用頻度の違いは注目される。

表4 じゃの談話内での出現環境別比較

「じゃ」の出現環境	日本人学生	外国人留学生
テーマ導入の問いかけ	8	9
提案	25	11
合意	2	4
先終了句の交換	7	5
別れの挨拶の交換	12	14
不明	1	4
合計	55	47

5 合意時の表現比較

提案内容の違いに加えて、提案に対する合意表現にも、日本人と留学生の間に違いが見られた。提案への合意には、以下に示すような3グループ5タイプの表現が見られた。

(A) 明示的表現グループ

1) 「分かりました」タイプ

「あ、はい、分かりました」

「今日の夜、夜、夜、テレビがあるのに、まあいいよ、分かったよ」

2) 「いいよ」タイプ

「ああ、いいよ」

「オーケーでーす」

(B) 暗示的表現グループ

3) 繰り返しタイプ：当該の提案に対して直接的に合意表明はしないが、次のテーマに関する発話内で相手の提案をそのまま発話の一部として利用することによって暗に合意をほのめかすもの

（「木曜日の3コマあるけん、その後」という提案を受けて）

「おーおーおー、じゃその3コマ後に研究室に来てくれんかねえ」

(C) 非明示的表現グループ

4) あいづちタイプ

「はあい」「うん」「あはい」などのみの応答

5) 応答なしタイプ^{注3}

J19：じゃあ1時。

えーとP食堂でいい？

J20：うん

表5は限定的提案、非限定的提案の全てに対してどのグループの合意表現が用いられたかをまとめ、日本人と留学生で比較したものである^{注4}。提案数は表3が示すように、限定的提案は日本人29件、留学生30件であった。限定的提案に先行する非限定的提案は、日本人31件（内訳：1×11+2×8+4×1）、留学生21件（内訳：1×7+2×4+3×2）であった。

表5 日本人学生と外国人留学生の合意のための応答表現比較 件（割合）

合意表現グループ （応答が向けられた提案タイプ）	日本人学生			外国人留学生		
	非限定的提案	限定的提案	計	非限定的提案	限定的提案	計
明示的表現	2 (6.5)	13 (44.8)	15 (25.0)	4 (19.0)	19 (63.3)	23 (45.1)
暗示的表現	3 (9.7)	2 (6.9)	5 (8.3)	5 (23.8)	2 (6.7)	7 (13.7)
非明示的表現	26 (83.9)	14 (48.3)	40 (66.7)	12 (57.1)	9 (30.0)	21 (41.2)
合計	31	29		21	30	

表5を見ると、一般に非明示的の応答表現は、相談の途中段階に現れる非限定的提案に対して用いられ、他方の明示的の応答表現は、最終的合意に関わる限定的提案に対して用いられる傾向にあることが分かる。ところが日本人と留学生を比較したとき、そのどちらのタイプの提案に対しても、日本人はより多く非明示的の応答表現を用い、留学生はより多く明示的の応答表現を用いていることが分かる。限定的提案での非明示的の応答表現は、そのような表現を使用することの少ない人から見れば、確かに合意形成がなされたことと実感しにくいだろう。またたとえ最終的に明示的の応答表現で合意を表明しても、非限定的提案において明示的の合意がなされないと、合意への経緯が見えないところへ突然に結論がでたようで、「いつ合意がなされたのか分からない」という印象をもたれる

ことは十分に考えられる。そういう印象があるところへ、前節で見た直前のやりとりを合意済みであることとして扱う「じゃ」が使用されると、なおさらにそんな印象が強くなるかも知れない。

6 まとめ

以上「相談して日時場所を決める」という言語行動を日本人と留学生を比較しながら見てきたわけだが、まとめると以下ようになる。

- (1) 談話者の役割意識の違いが見られた。本資料の設定場面に限定してではあるが、日本人では相談者と被相談者という役割分担が見られたのに対し、留学生では対話者の間に役割の違いはなく相互に対等な相談者達という関係であった。
- (2) 提案の仕方に違いが見られた。日本人は日時場所が一義的に限定されるような提案は先延ばしにし、より限定しない提案から一步一步絞り込んでいく傾向があった。留学生の提案は限定的な傾向にあった。
- (3) 提案に合意する際の表現に違いが見られた。日本人はより明示的でない表現を使用する傾向にあり、留学生の合意表現は明示的であった。
- (4) 新しい局面への移行シグナルと考えられる「じゃ」の使用頻度に違いが見られた。日本人に高頻度であるのは提案や合意が明示的でないのを補完する働きがあると思われるが、提案や合意を明示する留学生には余剰的なのか、使用は少なかった。

外国人にとって日本人による合意形成過程が分かりにくいのは、まずは提案内容が漠然としており、かつ合意表現が曖昧であるからだ結論づけることができる。そしてそれにもかかわらず、「じゃ」によってそれらが合意済みであるように扱われることが分かりにくさを強めていると思われる。他方談話者の役割意識の違いについては、分かりにくさというより合意形成への協力という点で不満を感じさせる可能性がある。ここで再度表1にあげた談話例を眺めてみると、留学生の被依頼者(F2)の積極的な協力を比べ、日本人の被依頼者(J20)の消極的受動的な態度が目につく。

ところでこれら個別的な現象はいわば個々の方略として現れた結果であり、その背景には我々の社会に固有の行動規範が隠されていると思われるが、そ

れは一体何だろう。斉藤他(1997)、大浜(1998)では日本社会におけるその規範とは「主導を避けよ」であるとされているが、ここでの我々の結論も同様である。「主導を避けよ、避けられないときは最小の主導にとどめよ。」

先にまとめた4点について、日本人に関する部分を主導を避けるという視点から解釈し直すと、以下のようになる。

- (1) いずれの談話者も主導を避けようとするが、それでは談話は停滞する。停滞が起こり日時場所が決まらず、結果アンケート調査ができないとすれば、困るのは依頼者である。依頼者は、やむを得ず、あるいはそのような事情を盾に主導する。被依頼者には主導の言い訳になる事情がない。両者の役割関係の違いはそこから来ている。
- (2) 提案することは主導することである。主導するときはその程度をできるだけ小さくし、さらなる主導の余地を相手に残しておく。
- (3) 合意表明をすることも主導することである。その程度をできるだけ小さくし、自分の応答で合意が成立することを避けようとする。
- (4) 「じゃ」は談話展開上の移行標識であるから、主導を意味する。しかし「じゃ」は同時にそれまでのやりとりが処理済みであることを前提とするため、(1)に述べたのと同様の事情を背景にした主導である。

注

- 1) 外国人留学生の出身地は、中国、台湾、タイ、韓国、マレーシア、オランダ、アメリカと様々であるが、本稿では日本人の行動を明らかにすることを目的としているので、一括して非日本人と位置づけている。談話収録は1997年11月、広島大学キャンパス内。ロールプレイヤー達は全て広島大学学生ならびに留学生である。留学生達の日本語能力は上級以上で、ロールプレイ実施に問題はなかった。
- 2) 先終了句とは、Schegloff/Sacksによると談話を終了に持ち込むための発話交換に現れる発話で、もはやこれ以上話すことはないことを示す発話をいう。ここでは既に合意された日時場所を再度確認する発話をこれに含めた。
- 3) J20の「うん」は「1時」に対しても合意されたとの解釈も成り立ちうるが、ここでは1発話

1 機能の原則で数えたため「1時」という提案には直接応答がなかったとして扱った。

参考文献

- 巖ナオミ (1986) 「意志決定 プロセスと表現に見られる日本人らしさ」『言語生活』415号, 56-61.
- 柏崎雅世・足立さゆり・福岡理恵子(1997)「インフォーマルな「と」相談における提案の分析」『日本語教育』92号, 60-71.
- 熊谷智子 (1994) 「異文化間誤解の事例の検討について留意点・課題点」『在日外国人と日本人との言語行動的接触における相互「誤解」のメカニズム』平成5年度科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書 国立国語研究所 86-100.
- 熊取谷哲夫 (1992) 「電話会話の開始と終結における「はい」と「もしもし」と「じゃ」の談話分析」『日本語学』Vol. 11, 9月号, 14-25.
- 大浜るい子 (1997) 「日本語による会話終了のメカニズム解明のための予備的考察」『広島大学教育学部紀要』第二部第46号 159-167.
- 大浜るい子 (1998) 「日本人の言語行動 談話展開のためのストラテジー」『広島大学日本語教育学科紀要』第8号 97-105.
- 斉藤みちる・徐愛紅・多田美有紀・大浜るい子(1997) 「談話分析から見た異文化間コミュニケーション 日本人の言語行動を中心に」『広島大学日本語教育学科紀要』第7号 185-193.
- Schegloff, Emanuel / Harvey, Sacks (1973) "Opening up Closings" *Semiotica*, Vol. 8, 289-382. 北沢裕・西阪仰訳 (1989) 『日常性の解剖学』マルジュ社 177-241.
- Stubbs, Michael (1983) *Discourse Analysis: The Sociolinguistic Analysis of Natural Language*. Oxford: Blackwell. 南出康世・内田聖二訳(1989) 『談話分析』研究社
- 杉戸清樹・生越直樹・佐々木倫子・早田美智子・堀江プリヤー (1992) 「『誤解』のメカニズムの記述をめざして」『日本語学』11巻 13号